

インタナショナルスクールはどんなところ？

― G I I S 東京校を取材 ―



私たち青森大学東京キャンパスの学生グループは、キャリア特別演習Ⅰの新聞制作プロジェクトでお隣りのグローバルインディアンインタナショナルスクール（G I I S）を取材した。インド人や日本人の子供たちに英語で授業を行う様子は、まるで別世界のようにだった。

授業の様子

― 教室で見た学びの工夫 ―



G I I S には4歳から6歳の子供が多い。G I I S では、ナースリー、K1・K2の三つの学年で授業を行っている。4歳の子はナースリー、5歳の子はK1、6歳の子はK2に分けてある。クラスごとに子供の能力と知識に応じたカリキュラムを設定している。ナースリーの時から英語の授業があつて教え方は単語を覚えさせることから始まる。例えば、教科書の鼻の写真を指で指して、「This is a nose」と言いながらみんなで鼻を触って覚える。先生が自分のイヤリングを指して「What is this?」と英語で聞いた後、「This is ear and this is ear rings」と教えていた。ナースリーの英語の授業は一日15〜20ぐらいの単語を覚えることになる。

K1とK2になったら、短い文章を教え始める。例えば、「It is sunny today. What day is today? Everyone is smiling. Let's handshake」などだ。実際には生徒がだれでも分かるように画像、絵本、写真などを使って教えている。各学年で日本語とアートクラスがある。アートクラスではピアノやギターの基礎を教えていた。

二階の図書館ではモンテッソーリ教育で道具や写真などを使う授業が行われていた。レベルは混ざっていると聞いた。先生が真ん中に入つてやり方やガイドラインを教えた後で子供たちが自分で学ぶ。写真を一人ずつ5枚まで持っていて、その写真の当てはまる言葉のカードが箱の中にあり同じものをマッチングし、終わったら他の子供のカードと交換してやって行くという授業だ。本を読んでいる子供もいた。最後に手品みたいなクラスもあった。実は手品ではなく科学の授業だった。マグネットなどを使って磁気を体験する授業だった。

授業の様子

— 教室で見た学びの工夫 —



取材当日、私たちはG I I S東京校の幼稚園クラスを見学した。教室では、英語を使った授業が行われており、先生はアルファベットが書かれたカードを手に取り、発音を繰り返しながら子どもたちに声をかけていた。

子どもたちは先生の動きをまねしながら、手を挙げて英語を声に出して答えていた。英語が初めての子どもも多かったが、歌や簡単な動作を取り入れた活動を通して、楽しそうに授業に参加している様子が印象的だった。

また、工作の時間では、色紙や道具を使いながら、友だちと相談し協力して作品を作っていた。先生は一人ひとりの様子を見ながら声をかけ、子どもたちが自分のペースで取り組めるよう配慮していた。

ライブラリーには、英語の絵本や数字、算数を学ぶ教材が並んでおり、自由に手に取って学べる環境が整えられていた。こうした授業を通して、英語力だけでなく、自分の考えを表現する力や、友だちと関わる力が育てられていると感じた。

G I I Sとは？

―多文化と多様なカリキュラムを
持つインターナショナルスクール―



G I I S (Global Indian International School) は、日本にしながら国際的な教育を受けることができるインターナショナルスクールである。さまざまな国籍や文化背景を持つ子どもたちが集まり、英語を中心とした教育が行われている。

G I I Sには複数のキャンパスがあり、学年や教育内容によって分かれている。ナ―サリー（幼児教育）から初等・中等教育まで幅広い学年があり、成長段階に応じた教育環境が整えられている。ナ―サリーからK2まではモンテッソーリ教育を取り入れ、子どもたちが自分で考え、行動する力を育てている。

G I I Sとは？

―多文化と多様なカリキュラムを
持つインターナショナルスクール―



K3以降は、IB（国際バカロレア）カリキュラCBSE（インドのナショナルカリキュラム）など、進路に応じた選択が可能になる。IBカリキュラムでは、国際的に認められた教育プログラムを通して、大学進学に必要な力を身につけることができる。

またG I I Sでは学習面だけでなく、安全教育や行事にも力を入れている。毎月の防災・避難訓練や、さまざまな国の文化を紹介するイベントが行われ、保護者も参加できる機会が多い。こうした活動を通して、子どもたちは多文化への理解を自然に深めている。今回の取材を通して、G I I Sは「勉強する場所」だけでなく、国や文化の違いを学び合いながら成長できる学校であると感じた。

3人の先生の話

—子どもたちの成長を支える教育の工夫—



Teacher: Beena Mistry, Nidhi Shinghal, Monica Joel

G I I Sで働く3人の先生に話を聞き、英語教育や授業への考え方について知ることができた。先生たちはそれぞれ異なる経歴を持ちながらも、子どもたちの成長を第一に考えて教育を行っている。

Monica先生は、もともとコンピュータの専門家として働いていた経験を持つ。最も大変なことは、「英語を英語で教えること」だという。ナーサリークラスでは、入学時に英語がほとんど分からない子どもも多く、最初は2〜3語しか知らない場合もある。そこで、写真や実物を使いながら、「これはりんごです」といった簡単な単語から少しずつ教えていく。トイレの場所を聞くなど、生活に必要な英語も同時に身につけていくという。

Beena先生は、K1の授業について話してくれた。K1では文章を基礎とした学習が始まり、「I like」 「I do」 「Today is」 などの短い文を使って英語に慣れていく。ナーサリークラスで「I like water bottle」などの表現に触れているため、K1では復習のような形で自然に文章作りに進めるそうだ。

3人の先生の話

—子どもたちの成長を支える教育の工夫—



Nidhi先生は、GIISの教育方法について説明してくれた。GIISでは、モンテッソーリ教育、インドのカリキュラム、そして伝統的な教育方法を組み合わせた授業を行っているという。生徒の理解度には個人差があり、早く終わる生徒には追加の課題を与え、時間がかかる生徒は待ちながら進めるなど、一人ひとりに合わせた対応が行われている。

また、先生たちは屋外での授業を特に大切にしていく。花や海、川、空、木などを実際に見ながら学ぶことで、生徒たちは楽しみながら集中して学習できるといふ。可能な限り毎日外に出るようにしているそう。

最後に、先生たちは「この仕事には忍耐力が必要」と語ってくれた。子どもたちからの大きなエネルギーを受け止めながら、前向きに関わり続けることが大切だといふ。その姿から、教育に対する強い思いが伝わってきた。

校長先生の話

— 学校全体を支える役割 —



Principal : Prerna Mannan

多国籍な生徒たちが学ぶ国際学校G I I S。その教育現場を率いるプレルナ・マンナン校長に、学校運営や教育方針、そして日々大切にしている思いについて話を聞いた。

「最大の課題は、生徒たちの言語力の差です」と校長は語る。G I I Sには、英語を母語とする生徒から、英語をまったく理解できない日本人の生徒まで、さまざまな背景を持つ子どもたちが在籍している。特に英語が苦手な生徒に対しては、幼稚園の低学年から単語を絵や実物と結び付けて指導し、日本語が話せるスタッフと連携することで、学習面と生活面の両方を支えているという。

「まずは学校の環境に慣れてもらうことが最優先です。安心して過ごせる雰囲気を整えることで、子どもたちは自然と英語にも親しんでいきます」

最後に、教育に携わる仕事について問われると、校長は次のように語った。

「子どもと真剣に向き合い、成長を支えたいという思いがある人にとって、教育の仕事は非常にやりがいがあります。モンテッソーリ教育などの専門研修を受ければ、さまざまなバックグラウンドを持つ人が教育の現場で活躍できます。何より、子どもたちの笑顔が私たちにとって一番の励みです」



保護者と子供の話

寺門玲衣（3歳）の母親、寺門玲奈さんは「英語ができる」と、旅行するときに使え
るし、将来の選択肢が増えると思ってこの
学校に入れました。子供はパズルや算数が
好きで楽しんでいます」と話していた。

K2（6歳）の生徒の母親にG I I Sへ通
わせるきっかけを聞いたら、友達で紹介で
G I I Sのことを知って異文化や多様性と
英語を重視するのがよいと思ったからだそ
うだ。2歳の弟もG I I Sへ通わせるつも
りだという。

K2の男の子は「アートクラスが一番好
き」と話していた。



初めてのニュース活動で、取材やその後の整理が思った以上に難しいと感じました。しかし、経験がなからこそ新しい発見も多く、とても有意義な時間を過ごすことができました。この経験を今後に活かしていきたいと思います。

フカロク

社会学部



G I I S 国際学校を訪問して、一番印象深かったのは「中学校で遊ぶ」という理念と多文化環境です。学校はモンテッソーリと国際課程を融合させ、ゲームを通じて子供の言語能力と社会性を育成します。多国籍の学生に対して、教師は辛抱強く指導し、それぞれの子供が違いを尊重する雰囲気の中で成長させます。このような教育は、将来のためにより多くの国際視野を持つ人材を育成している。



今回のインタビューを通じて、国際学校と普通学校の教育思想、理念及びモデルが、確かに一般の学校とは異なるものであることが確認された。私は先生に学生の将来の発展について尋ねてみたが、ここでの教師は、伝統的な意味における「権威」というよりも、むしろガイド的な存在であり、知識そのものを教授することよりも、学習方法や技術の習得を重視している。それによって、子どもたちの学習を、「教師による知識伝達」から「自ら探求し知識を獲得する」過程へと転換させているのである。

また、教育とは単に知識を習得するのみならず、世界及び自己に対する認識を深めるための探求過程であるということも理解された。

ニンオンマーライン

ソフトウェア情報学部



私にとって、新聞・ニュース制作プロジェクトの中で一番印象に残っている思いは、G I I S を訪問し、インターナショナルスクールの1日を見学したことです。子どもたちの元気で無邪気な姿や、学校のオープンマインドな指導方法、そして先生方の積極的な教え方を実際に見て、本当に感動しました。このプロジェクトに参加したことで、メンバー同士でさまざまな相談をしながら活動する機会が増え、コミュニケーション能力が向上するとともに、日本語の力も身につけることができました。このプロジェクトを通して、自分自身が成長できたと感じており、1年生の中でも特に貴重な思い出の一つだと思っています。

アグラバンテ リラゼル

ソフトウェア情報学部



今回のインターナショナルスクールの取材を通して、国際教育が子どもたちに与える影響の大きさを実感した。授業では、英語を学ぶこと自体が目的ではなく、英語を使いながら自分の考えを表現し、他者と関わる力を育てている点が印象的だった。また、先生方が子ども一人ひとりの個性を尊重し、安心して学べる環境を整えていることから、子どもたちの積極的な姿勢が生まれていると感じた。今回の新聞制作と取材活動を通じて、教育の多様性について考える良い機会となり、自分自身の視野も広がった。

サンザニコ

ソフトウェア情報学部



実際の新聞を自分で作ったことで色々な苦労や経験を通りまして良かったと思っています。私たちが毎日読んでいる新聞はどやって作っているのか、やり方の流れも知らなければ、ならないので読売新聞会社への見学や先生たちの指導で新聞作りの流れを学びました。そこから自分のチームで初めて作る新聞の計画のアイデアを考えました。取材することは一番苦労した部分ですが、取材することは新聞作りに欠かせないといけないことです。皆さんもぜひ新聞作りに体験してみたいです。新聞作ることだけでなく、何でも実際に最初から最後までやってみたことでぜひ自分の感想やアイデアが出ると思います。



トゥタサン

総合経営学部

私は、これまでお隣が幼稚園だということを知りませんでした。白川先生の新聞制作プロジェクトに参加したことで、インド系インターナショナルスクールを実際に訪問し、取材する貴重な機会を得ることができました。

この学校にはさまざまな国の子どもたちが通っており、非常に多様性に富んだ環境だと感じました。私たち取材者が子どもたちや先生方がとても温かく迎えてくださり、安心して交流することができました。

子どもたちの生き生きとした笑顔を見て、教師という職業を目指したいと思うほど、心に残る素晴らしい経験となりました。